

菖蒲枕

〔古今要覽稿時令〕あやめのまくら菖蒲枕 五月五日菖蒲をもて枕にしく事は、中むかしよりはじ

まれる事也、前中納言雅頼卿歌に、都人引なつくしそあやめ草かりねの床の枕ばかりは、又俊成

卿の立花にあやめの枕にはふ夜は、とよまれたるによれば七百年ばかりのいにしへよりして

用ゐられしもの也、嘉禎四年五月四日、自將軍家被調進、菖蒲御枕并御扇等於公家と東鑑みえたる

によれば、嘉禎の比は、あづまにても用ゐられし事、えられたり、又明應の比には、世にあまねく用

ゐられしものとみえて、五月五日、今宵は菖蒲の枕しく夜也とて、まき侍りてと關東海みえたる

にて明らか也、凡五月五日、あやめ草をもて屋の軒にふき、或はかづらとなし、或は續命縷につく

り、或は枕に考く事、皆時の邪氣をさけはらはん爲に用ゐらる、なり、菖蒲は辟瘟氣と荆楚歳み

えたり、又同日、あやめの筵を用らる、事、三百年前よりあり、五月四日の夜、菖蒲の御筵御枕参り

て、まかせられて御まづまり候と殿中御みえたり、是も邪をさけ、あしき虫などをよくるまじな

ひに用ひられしにや、さて又禁中へは、五月四日新藏人あやめの御枕獻するよし、禁中、年中行事

年中、下行帳にみえたり、枕のつくりかたは、菖蒲をたけ五六寸ばかりにきりて、五寸廻りばかり

に、跡さきをかみひねりにて結びて、兩方の小口によもぎをさし、挾むよし、後水尾院當時、年中行

事に、まざるさせ給へり、

〔日次紀事五月五日〕菖蒲御枕自六位藏人獻禁裏院中

〔後水尾院當時、年中行事五月四日〕略、中あやめの枕薄やうに一對、こよひ御枕本にあり、薄やうは

極薦調進す、御枕は、勾當内侍より出す也、其やう、あやめをたけ五六寸ばかりに切て、五寸廻りば

かりに跡さきをかうひねりにて結びて、兩方の小口によもぎをさしはさむ、

〔恒例、年中行事五月五日〕菖蒲御枕、是は菖蒲をふとさ四寸廻り、長さ三四寸ばかり、跡先を紙

捻にて結たるもの也、長橋局より獻らる、上包の薄様は、極薦より調進す、